
輝きの戦士たち

神名 心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝きの戦士たち

【ZPDF】

Z9306X

【作者名】

神名 心

【あらすじ】

少年アレクは母の病を治すために旅立つことを決意する。強い運命の計らいによって世界を舞台とする闘争に巻き込まれていく。ファンタジー巨編ついに開幕！！毎夜10時更新！！お楽しみに！

木に登れない少年

秘薬があれば……。

あの秘薬があれば……。

闇の中で蠢く人間のような白い物体。人の形をしていたものが大小を繰り返し、やがて螺旋の紐に形を変え暗闇の一点に吸い込まれていった。その入滅が終わった瞬間、黒かつた世界は縁に色を変じさらに爆発するよう広がったかと思うと、そこには丸い球体、石榴の実のようなみずみずしい赤さをもつたものが生まれた。続いて、白い目のようなものがその球体に一つ浮かんだ。白い橙円の中からぽんやりと黒い点が出現する。毒々しい表情だ。目のみだつたが、たしかにそう思える何かがあった。

愚かなるは光。我を閉じ込めたのは輝きの四戦士。憎い。實に憎い。

我は閉じ込められたといえども、そのものたちを呪う力はある。ふふふ。いや、やつらの子孫代々にわたって苦しめてやろう。くくく。そして我が復活した時に奴らを従え世界を征服してやろう。

人間たちを支配し、この世の地獄をみせてやろう。

悪に魅せられし、同胞よ。集え。闇を抱えた人間よ。集え。

月日は伝説の時代より遙かに流れ平和な日々が多くの人々に享受されていた。

ここは大陸の南端にあるランデッサという町。ランデッサとは古い言葉で「輝ける町」という意味である。この町は、かつてこの世界

を滅ぼそうとした邪神から世界を守った者が仲間とともに開いたと云い伝えられている。それが正確にはどのくらい昔か、そして、その子孫は今どうなっているのかはあまりにも長い時間が経ち過ぎたため、最早この町の人々には忘れ去られてしまった。

南には広大な海が存在していた。あまりの波の激しさに漁をすることは困難だつた。北西にはブナの大森林が大地を埋め尽くしていた。町の東には広大な農地があり、みな芋やニンジン様々な野菜、米などを作つて暮らしていた。

そのため、一部の者を除いて昼過ぎには大人たちは皆働きに出て、町は子供たちの独壇場になるのであつた。町外れの森で少年たちが戯れている。いや、その表現を使うにはいささか不穏な気配である。

「やーい、弱虫アレク~」

木の上にいる、ニキビ面の少年が枝になつている実をむしりとつた。彼は手に取つた硬い実を下に向かつて投げつける。実はアレクの肩に当たつて地面に落ちた。よくみると木には数人の子供たちが登つていて、にやにやしながら見下ろしている。アレクは自分の頭に降り注ぐ実にじつとたえていた。

「悔しかつたら登つてみろ」「腰抜け~」

今度は言葉の攻撃だ。様々な罵詈雑言が降つてくる。

アレクには登りたくても、登れないわけがあつた。

昔、木に登つていたところ誤つて落ちてしまつたのだ。命にかかる重症ではなかつたが、右足を怪我してしまつたのだ。

木登りごつこに入れない失意のアレクはそつと悪口に背を向けて家のほうに向かつて歩き始める。途中で別の木を見つけて登つてみようと試みるが、右足がすくんだ。母からも「もう2度と木には登らないと約束してちょうどいい」と強く懇願されていたのを思い出した。どちらの理由によつてかはわからないが、おそらく両方の理由によつて、アレクは今日も木に登れなかつた。

ふとアレクの胸をうつすらと冷たい風が吹きぬけた。とたんにアレクは悲しい気持ちになった。

昔、授業で習った英雄ベルグブルク。彼のように僕も森を飛び回りたい。あのムササビ農夫の異名をもつ男のように領主を捕まえてやつつけるのだ。みんなに尊敬される人間になりたい。いっぱい母にも樂をさせてあげられるのに……。でも、子供の僕にはそんな力はない。

アレクは子供特有の夢想で頭がいっぱいだった。

実際の史実では、ベルグブルクの両親は領主の親衛隊によつて処刑されている。もちろん大人たちは子供にそこまで教えることはしなかつた。

氣弱なアレクは常に見下され、いじめられていた。それが現実だった。

そんな毎日が過ぎていったある日。レンガで作られた赤茶色の立派な校舎では数十人の子供たちが授業を受けていた。

教壇には教師が唇をしかめて立つてゐる。袖なしの赤い服を着ていた。さすがに寒い季節の今、袖なしはおかしいらしく、生徒のからかいの対象になつていて。教師は陰口を知つていたのだろうか。生徒に厳しく体罰をすることあるごとに繰り返していた。この日も、生徒たちが私語をしていたのを怒りの形相でにらみつけた。そしてアレクを呼びつけると教鞭でピシッと叩く。アレクは

「どうして僕が……」

と言つたが、教師は

「学級長だらう、代表責任だ」

と言つのみだつた。彼がいじわる集団の投票によつて学級長にされたばかりでなく、彼には立場の弱い母しかいなかつたためだ。他の生徒に体罰でもしようものなら親にどなりこまれるだらう。

だが、アレクのことなど知るか、とばかりにニキビ面の少年が大声で相方のおかっぱ頭と話し始める。

これには教師も閉口した。どうすればいいだらうかとしばらくな案していたようだが、なんとアレクに一人を「叩いてこい」と言い出した。しかし、アレクには叩けなかつた。頭の良い彼には母が迷惑をこうむることが目にみえていたからだ。生徒に体罰を代行させるとのが素晴らしい案と思つていた教師は怒り命令に従わないアレクの腕をひどく赤くなるまで叩いた。

アレクの母は雇われ農婦だつた。雨の日も風の日も仕事があれば出かけていき、ぼろぼろに疲れ果てても、わずかばかりの貯えとパン代が手に入るくらいだつた。大農家にも雇われていた。だからアレクはその息子たちにいじめられても何もいえなかつた。もっとも

元々気立ての優しい子で、やつ返せうなびと構えるはずもなかつたのだが。

この日もじつと腕の痛みをじりやながら家路につき、遅くに帰つてくんだらう母に腕をみせなこよつにずっと腕を冷やしていた。しかし、アレクの今日の災難はこれだけではなかつた。

母の病

母が農作業中に倒れたのだ。アレクは数人の村人が母を無造作に運びこむのを心配そうにみていた。

雇い主の男は

「これで母さんをみせてやるといい。お前の母さんは良く働いてくれたよ。もつとも鈍くさくて、他の雇い農夫から同じ給料をもらうのが不公平だつて抗議されて、こっちも大変だつたからな。明日からはもうこなくていいよ。ゆっくり養生するといい。ふん」

といつて、とても医者を呼べないような、はした金を渡した。母が必死で稼いだお金だつた。わずかでも無駄にするわけにはいかなかつた。

「ありがとうございます。……」

重かつた。このお金は重かつた。そして母の病状もアレクが思つたよりずっと重かつた。

「母さん。母さん。しつかりしてよ」

次の日からアレクは学校にも行かず、つきつきりで必死に看病したが母の病状はいつこうによくならなかつた。母の体は氷のようにならなかつた。川に水をくみに行つて沸かしたお湯につけた手ぬぐいで体をふいてあげるのが毎日の日課だつた。

「あの人伝染病じゃないの。また同情を誘おうっていうのかしら」
そんなんあらぬ噂が町の心無い人たちによつて流された。

これはアレクの母が人並み以上に美人だつたからに他ならない。

若いころは村一番の美人といわれ、伝統的なランデッサと隣町ゲルドクルで開かれる祭の踊り子にも選ばれたほどだつた。そんな彼女がある日お腹を膨らませたのだから、当時の大人たちの落胆や憤りは激しかつた。彼らは何とか彼女に父親と結婚させようとした。しかし、ついに誰の子か口をわることなくアレクを産んだ。そんな事情もあつて嫉妬や、やつかみが幾分人々の口に火をつけたのだ。

そんな様子を見かねた町長に頼まれた医者がある日やつてきた。

彼は白衣を着ていて、アレクの住んでいるみすぼらしい家を見て自慢の服が汚れるのを嫌つたが、他ならぬ町長の頼みなのでと冷たい目でアレクを見ると、ずかずかと家に入ってきた。

「私は医者のベルダンディだ。いやどうもアレクくんつていうのだね。これから君のお母さんを見てあげよう。めつたにないことだよ。無償で診るなんて、感謝したまえ。うん。何しろガルシャ・アルメイラ出身の医者なんてめつたにいないのだよ。君」

アレクは医者と聞いてただただ恐縮して、ガルシャ・アルメイラの素晴らしい医術で母親が治るかもしれないと希望を抱いた。医者は一人母の眠る寝室に入ると診察を始めたらしかつた。

しばらくした後、医者は出てきた。非常に重苦しい顔で……。

「单刀直入に言おうアレクくん。君のお母さんは非常に珍しい病だ。恐らく眠り病という病だ。私は専門医ではないのでこれ以上はわからない。まあ、このことは口外無用に頼むよ」

と、アレクの小さな手に何かを握らせた。5ゼルト硬貨だった。アレクはきょとん、として訊ねた。

「なんですか？ これは」

「なんですかって、君。私が患者を治せなかつたと評判が立つのはよろしくないのだよ。まあその金でせめてゆっくり看取つてあげるのだね」

医者は口を開けて帰ろうとすると、アレクは後ろから必死にしがみつく。

「先生。看取るつてどういうことですか。母は……。母は死ぬのですか。治す方法はないのですか」

アレクの汚れた手で白衣を触られたベルダンディは真っ青になつて「わかつた。わかつた。教えてやるからその手を離しなさい」と言つ。アレクは冷静になつて、医者の衣服から手を離すと「すいませんでした」

と小さな声で言つ。医者は演説をする前のように軽く白衣を整え

ると、話し始めた。

「いいかい。アレク君。眠り病については、我々は必死になつてそれを日夜研究している。あのガルシャ・アルメイラでだ。わかるね。うん。そうだ。あの医療都市でだよ。思えば、そうこの地から魔法の伝統が失われて数百年、科学の力によつて我々はここまで恩恵を手にしたのだ。ん？要点だけを言え？注文の多い子だな。つまり、ガルシャ・アルメイラに行けば何かわかるかもしれんということさ」「そんな、もしかしたら治せないかもしれないのですか？母はどれくらいもつのですか？」

「わからん。だが、もつて、そうだな。数ヶ月といったところだろう。だが、行つてみる価値はあるかもしれないな。君。じゃあ、私は失礼するよ。お大事に」と冷たく言い、家を出て行つた。

しかしアレクには一筋の希望が見えた。たつた一人の肉親を亡くすか亡くさないかという瀬戸際で少年はそれにすがった。そして、驚くべき行動に出たのだ。

次の日アレクは悪名高い町の高利貸しのビジョル・ミーチを訪ねた。

この男は金貸しという理由でやはり村人から軽蔑の目でみられた。そんな境遇が似ていることも手伝つてか、不思議とアレク親子には優しかった気がした。もつともミーチに言わせれば、ここの中の人びとを自分の客としかみていなかつたからである。そしてアレク親子はそれなりにいい客にならうと考えていたからだ。というのもアレクの母ランラヒルムは貧しいながらも家と土地の所有者だつたからである。いずれアレクに相続させるために必死になつて歯を喰いしばつて、それだけは守り抜いてきたのだった。アレクによくその夢を語つて聞かせたものだった。

室内は薄暗く、怪しい雰囲気が漂つていた。アレクが来たのをみると、ミーチはにんまりとして大人をもてなすように椅子を勧める。「ようこそ。アレクさん。これは、これはいったいどういった用件ですかい」

と愛想よく話かける。アレクは率直に切り出した。

「ミーチさん。ここにきたのはお金を貸して欲しいからです」「待つていましたよ。アレクさん。実はあそこの土地を買いたいといつお客様がいっぱい、いらっしゃるのですよ」

ミーチは満面の笑みをさらに大きくすると、まるで化け物のよつに笑つた。アレクはぞつとしたが、悪魔に魂を売つてもかまわないという決意を抱いていたので、承諾した。

「家も土地も売つてしまつていいです。旅のお金がほしいのです」母は悲しむだろうが、アレクにとつて家や土地などは母の命に比

べればどうでもよかつた。

「いいでしょ。アレクさん。お母様はしかしどうなさるので？」

「母は……」

アレクは迷つた。母はあなたの家に置いていただけませんか、といいたかつたが、心配だつた。信頼できる大人もいない。そうだ……！「ミーチさん。母が生きている間、家はそのまま置いてくれませんか」

「アレクさん。それは無茶ですよ。看病は誰がするのです？」

アレクはそこでミーチに病のことを話した。半信半疑だった金貸しは何やらざるがしきことを思いついた。そういうえば、遠くの町に病の研究をしている変な成金の爺さんがいたな。あの爺さんに母親が本当に呪いにかかっているならば高く売れるかもしれませんな。もしもそうでなくて、死んでもこいつちはまったく損はしない。いい取引だ。

「ようござます。アレクさん。お望みのままに」

ミーチは何やら紙に万年筆で書きあげると奥の棚の引き出しからナイフをゆっくり取り出すと、薄気味悪く笑みを浮かべアレクの前にゴトーンと置いた。そして、人差し指でどこに判を押すか指示示すと、どつかりと腰を丈夫そうな椅子に下ろした。アレクはこの男を信じていたわけではなかつた。この悪名高い男が子供のアレク相手にまともな商売をするはずがなかつたからである。相場の半分だろうか、4分の1だろうか、わからなかつたが、鋭いナイフで指先を少し傷つけると出てきた血で判を押した。お金と引き換えに。

翌日アレクは町で旅道具を買って準備した。旅たちのときはきたのだ。北に向かうミルベニア街道をアレクは出発した。ゲルドクルから來ていた旅の商人にお金を払つて荷馬車に乗せてもらつたのだ。ガタゴト、ガタゴトと荷馬車は出発した。アレクの旅は始まった。

（母さん待つっていてね……）

そう思いながらアレクは故郷のランデッサが見えなくなるまで、じ

つと見つめていた。

アルバジルの話

街道の途中、なだらかな坂の上にくると『盜賊注意』と書かれた木製の古い看板がちらほらと田に入つてくる。アレクは心配になつておじさんに聞くと、めつたなことでは出ないから大丈夫だよ、と言つてくれた。初めての旅で少し興奮気味に話すアレクをおじさんは優しく接してくれた。

「わしにもお前さんと同じくらいの年の子がいてなあ。わしが行商に行こうとすると連れていつて連れていつてくれとねだつたものだ。そうだ。ムササビ農夫、ベルグブルクほど有名ではないが、このミルベニア街道に伝わる話を聞かせてあげよう。昔、そう。それもずいぶん昔の話だつたがなあ。行商人アルバジルというものがいてなあ。早くに妻に先立たれてなあ。三人の子供と一緒に行商の旅をしていたのだそうだ。それが、運悪く盗賊に出会つてしまつてなあ。相手は十人ほどいたと伝えられているのだがね。そのときアルバジルは自らの商品を守るために子供を誘拐犯に差し出したといわれているのだよ。なぜなら、そこにはゲルドクルの町で年に一回ある祭り、そうララルー祭に必要なもの黄金の女神像があつたからなのだよ。その商人の心意気にいたく感動した町の領主様、昔は領主様がいたのだよ。そうそう、そしてその領主様が兵を送つて盗賊を滅ぼしアルバジルの子供たちを助けた。というのが話だ。」

「おじさんは盗賊が来たら僕を差し出すの？」

アレクは不安に思つて聞いた。手をもじもじと動かしている。おじさんは一瞬、キヨトンとしていたが大声で笑つて言つた。

「そんなことするはずないじゃないか。心配するものじゃないよ」

アレクはほつとして、だんだん眠くなつてきた。あくびを2・3回繰り返して、なんとか我慢しようとするが荷台に寝転がると、眠りこけてしまった。

夢うつつの中で母親の夢を見たかったに違ひない。アレクはまだ

幼いのだ。

「ぼうや～、よいこだ～、ねんねしな～、地獄の果てまで、追つて
くる悪魔から逃げて～いつまでも～いきてゆけ～」

母の子守唄が聞こえてくる。ランティッサに伝わる唄。続きを読む
だつたろうか。忘れてしまつたのだろうか。聞きたかつたが、聞け
はしない。代わりに世界は重力を失い歪曲したかと思うと、今度は
暗い一室を映し出す。ここはどこだろう。アレクは不思議と知らな
いところでない気がした。室内には象牙で装飾された金の椅子がき
らきらと輝きを放つていて。誰かがそこには座している。誰だろう。
アレクは暗がりに目が慣れるまでじつと待つていたが、いつまでも
その人物の顔は見えなかつた。今度は一步進もうとすると何故か、
椅子は遠ざかる。「あなたは誰ですか」アレクは何故かその人に訊
ねていた。機械的な声が「アレクか…」と言つた気がした。何か懐
かしいにおいがした。そして再び椅子は遠ざかつていった。

ハツ。アレクは目を覚ました。もう夕闇が辺りを包んでいた。お
じさんが起きたアレクを見て「おはようさん」と笑顔でいつてくれ
た。アレクも挨拶を返す。それにしても不思議な夢だつた。目が覚
めた今でも妙にはつきりと覚えている。だが、それよりも母を思い
出した。「母さん……」アレクはこつそりつぶやいた。泣くわけに
はいかなかつた。泣いて樂になるかもしけなかつたが、母は良くア
レクが泣いていたときに「泣いてすむわけではないわよ」といつも
言い聞かせていた。だからアレクはじつと我慢した。母の涙だつて
見たことはない。そんな強い母なのだ。

「さあ。もうすぐゲルドクルだよ。ぼうや疲れたらう。宿はどうするのだい」

「行商人のおじさんはアレクを思いやるようになつた。

「僕は節約のため野宿でもしようかと思ひます」

「それはいけない。あそこは危険な町だよ。特に子供にとつて」
そんな時ふいに荷馬車の周りに人影が見えた。誰だろう。そうアレクが思つてゐると、へんてこな頭巾をかぶつた小さな群れはあつという間に馬の前に立ちふさがると、その中の比較的背の高い一人が低い声で言つた。

「俺たちは無法子供集団インジグ・インジーダだ。おとなしく金日のものを渡せ」

おじさんは子供の盗賊じつことでも思つたのか、平然として大きな声で怒鳴りつける。

「おい。お前たち。ふざけるのもいいかげんにしろ。わしは怒るぞ。どくんだ」

と言つた。リーダーらしきさつきの少年は腰元からナイフを抜くとあつという間に行商人に投げつける。
ひひーん。馬が暴れだす。ナイフは馬の脇をかすめておじさんの股の近くの荷車に突き刺さつた。

「ヒイイイイ」

相手が本気だと知つたのか、おじさんは脅えはじめた。田はあきらかに恐怖に凍りついてゐる。アレクも怖くて成り行きをずつと見ているだけだつた。

オロオロオロオロオロ。突然子供たちはみなナイフを抜き奇妙な声を出すと荷物に向かつてきだ。行商人は荷車の御者台から転げ落ちるようにして、ゲルドクルの町のほうへ逃げていつた。子供盗賊の一人がアレクを見つけて

「おい。ここに小僧がいるぞ。ん?なんだ。あのおっさんのお供じやないよな。似ても似つかないものな。こんな年で一人旅か?どういった事情だ。俺は無法な盗賊トツテル様だ。頭田インジーダの片腕さ」

「おい。トツテル。何をしてる。その子供もとりあえず、さうつていくぞ」

赤い頭巾の中から凛とした田でこちらを見るリーダーのインジーダがトツテルに声をかける。あたりに気を配ることも忘れずにあたりをキヨロキヨロしている。その視界の先には夜を迎える直前の森の不気味な様があり、動くものはない。トツテルは両手を上に上げて了解のポーズを作ると

「おい。逃げようとするんじゃないぞ。ひどい田にあうからな」

と怖い顔で言つたが、その後におどけて

「まあ。俺からインジーダに悪いようにしないように取り計りつてやるつて」

とアレクの背中を軽く励ますように叩いた後、笑つた。無言で荷物を調べている子供もいる。どうやらそれぞれ役割が決まっているらしい。少し太めの子供は、何やら帳簿のよつたものに書き留めている。内容は荷物を調べている者たちが交互に「唐辛子1、2、3、……」などと声をあげているのをメモしているらしい。時折指で数えている幼い子供もいるらしかつた。他の者は周囲にいて荷馬車を取り囲むように辺りを警戒している。

「終わったよ。インジーダ」

と太めの子が言つと

「トツテル。田隠し!..」

と声を張り上げる。声はトツテルの耳に入つて、その手はアレクに厚い布ですばやく田隠しした。

そして一行は出発し、夜の闇にまぎれてどこかへ向かつた。

盗賊が出た！！！

行商人仲間たちが、その知らせを受けてすぐに棍棒や剣それに明かりを持つて、現場へ向かつた。しかし、そこにはすでにわずかに人の足跡が残るのみだった。

「おい。この小さな足音見ろよ。どうやら盗賊たちが子供つていうのは本当らしいな。まったく子供相手に脅かされて、荷物を置いて逃げてくるとは行商人アルバジルの爪の垢のませたいぜ」

「おいおい。でも、あいつらが最近、アルデーヌあたりで有名な子供盗賊じゃないのか。インジゴ・インジーラだけ？名乗つたそうじゃないか」

「ばかやうつ。インジグ・インジーダだらうが。インジグは古い言葉で梟つて意味だらうな。盗賊の守り神ぞ」

「いけねえ。俺も年だな」

「とりあえず今日のところは暗いし帰つたほうがよさそうだな。」

「そうだな」

「口々に同意の声。皆それ明日の商売もあるのだ。

町の評議会でこのことが話あわれることになつた。

豪華な内装がちりばめられた一室には窓があり、その窓から日が射し込んでいる。日は床に長方形の窓を縮めたような形をつくる。そのすぐそばに琥珀色の椅子に座る口髭をたくわえた中年。木の葉のような紋様が描かれている襟のない服をきいている。男は指で机をこつこつと、苛立つて叩いて言つ。

「遅い。遅いぞ。約束の時間をもう5分過ぎてこりのうの」

「さ、さようじざいますな」

入り口側の椅子に座っていた老人はびくびくしながら答えた。

「まあいこ。仔細を話してみよ。組合長」

「はあ……。しかし、司祭様がお見えになられていないうですが「かまわん。すでに、我がミシコリアーゼ財閥は兵の派遣を決めている。問題は教会側が参加するかしないかということだ」

ちょうど、そこまで話終えたとき、若い青年が入ってきた。赤い髪。碧眼。優しげな表情をしている。老人に

「よろしく。シルバです。行商人の組合長さんですね。お待たせしました」

と深く一礼すると「グロッサ様も」と付け加えて軽く会釈して笑顔で中年に挨拶すると

「さて、盗賊がでたとか?」

と組合長に聞く。老人は昨日の出来事をたどたどしく話す。話の主導権を握られたグロッサは面白くない顔をして聞きいつている。そして話しが終わると老人を部屋の外に送り出す。そして、再び椅子に座ると一言ぽつりと

「教会は武装枢機卿を出します」

「なんだと!!!!」

これに驚いたのはグロッサ。

「ミシコリアーゼ家の当主ともあるう方が、何を動じておられる」と青年は、諭すように言つた。しかし、グロッサの動搖は大きかつた。

「この町に武装教徒を入れるときは一言ほじりとこつたはずだぞ」

「緊急の事につき、ご容赦願いたい」

「緊急だと? いつたい何があつたんだ。盗賊くらい我が私兵でなんとでもなるわ」

「子供盜賊なんぞに我々も興味はありません。問題はその頭目です。すでに枢機卿様が追つておられたのですが、見失つたようとして、人の口には戸が立てられぬと申しますが、うわさを聞いて、急遽こちらにお越しになられました」

「頭目といつても子供だろうに。いつたいぜんたい何故武装枢機卿が来るんだ」

「はー。どうやらその少年、魔法を使つたりして」

「……まさか、『覚醒者』なのか？手品ではないのか」

「わかりません。まあ、念には念をとこつゝとで財閥の丘もお願いしますよ」

じつじつ一人の話は終わった。

一方、アレクは不法子供集団の住処に連れてこられていた。森の奥深くのようだ。ひんやり冷たい空気。そして、一見それとわからないような薦に覆われた家。子供たちはここを家と呼んで暮らしているらしかった。暖かいスープがそこではふるまわれた。もちろんアレクにも。ここには故郷の大人たちの世界にはなかつた珍しい品々が所狭しと並んでいた。鷹を模つた長いパイプ。長方形の形をした砂時計。……

「今日は上出来だ。さて、捕まえた小僧は食い終わつたら、俺の部屋に来い。みつちり取り調べをしてやるからな」

と悪戯っぽい顔でインジーダが言つと、みんなが一斉に笑つた。アレクはまだ怖くて、びくびくしていた。インジーダという男は浅黒い肌をした、アレクの3・4歳年上くらいにみえた。圧倒的な存在感をもつて、仲間たちに信頼と畏怖されているようだつた。アレクはトツテルにつき添われてインジーダのところへ向かつた。

部屋に入ると驚く程質素な部屋で、紙と机とベッド以外は特に目を引くものはなかつた。

「それで、お前は何故あの馬車に乗つていたんだ」

インジーダは言葉遣いとは裏腹に優しく問い合わせる。アレクは空腹を満たされて安心したのも手伝つて、ついに話し始めた。

「僕は母さんを助けるために……」

アレクはぽつりぽつりと続ける。インジーダはふんふんと聞いていたが、母親を置いてきたあたりに話がいくと、少し寂しげ表情をした。

「よし。そうか。なら明日ゲルドクルの町まで行くから、そこまでは送つてやる。ただし、そつからは自分でなんとかするんだな」

「ありがとうございます。インジーダさん」

アレクは礼をいとペこりと頭を下げた。

「インジーダでいいぞ。それに俺らは盗賊だからな、礼を言われる筋合はない。おいトッテル。今日は客人だ。あつたかい羽毛布団を持ってきてくれ。俺の部屋のベッドで寝かせてやる」

両手を上げるとトッテルは部屋を出て行つて、すぐに戻つてきた。手にはあつたかそうな掛け布団が載つていた。

「おい。坊や。こいつで今日は天国行きだぜ」

と歯をみせる。

「じゃあ、もう遅いからな。おやすみ」

とこつて、インジーダは部屋の明かりを消すと、真っ暗になつた。

「おやすみなさい……」

少し心細そうな、アレクにトッテルが寄つてきて、「しあうがない一緒に寝てやるよ」とばかりに、布団にもぐりこんでくる。出て行こつするインジーダに

「おい、俺もこっちは寝るぜ」

と告げると布団を頭までかぶつた。インジーダは小声で「好きにしき」とつぶやくと足早に部屋を出でいった。

トッテルはなかなか眠れないアレクに様々な今までの武勇伝を語り聞かせるのだった。しばらくすると、いつの間にかアレクは眠りに落ちていた。

ケイト・ミシュリアーゼ

ケイトといつ名前は好きだったが、ミシュリアーゼ家は嫌いだつた。明るい未来、何不自由ない生活、優れた家庭教師、すべて彼女には色あせてみえていた。窓の下の路上をせわしなく歩き回る野良猫がうらやましかつた。

（ああ……。私はなんて不幸なのかしら。こうして休憩時間も屋敷から一歩も出られないなんて……。お父様は何に怯えていらっしゃるのかしら。私だって、年頃の子供たちと遊びたいのに）

ケイトは最近流行のルービックキューブを一人寂しく、いじつている。

（やういえば子供盜賊が出たと家庭教師が行つていて。どんな人たちだらう。きっと、とんでもなく自由に違いないわ。どうにかして抜け出す方法はないだらうか。世界の壁を今ぶちやぶるのよ。待つてなさい、世界）

やつてくる。圧倒的悪意がやつてくる。

親方はいつも兄弟子をひいきして俺にはまったく目もかけてくれない。技術ではまったく俺のほうが勝つているのに……。不満だ。不満だ。男はこんな考えに取りつかれていた。

一クイ。一クイ。カガヤキノヨンセンシノマツエイドモ。

男の頭にこんな声が響いてきたのは、およそ3週間前だつた。そのときはちょうど、家で家族と食事をしていた。何気なく空耳だらうと思つて気にせずには過ごしていた。だが、段々とその声は大きく頻繁になつていて。それと同時に男の体にも異変がおこつていて。夢遊病者のように夜起きて、叫んでいると家族は迷惑顔で言つ。何でもカガヤキノノセンシだとかなんとかの悪口をずっと言い続けているらし。石工の仕事をしている男はノミをもつて、今日も不満

げに働いていた。親方と兄弟子はでかけていて一人での作業だつた。すると、そこに一台の馬車が通りかかる。木の葉紋様が見える。ミシュリアーゼ家のものだ。車内はカーテンがひかれ、うかがい知ることはできなかつた。男は、ぼーと眺めていた。そのとき、ひよこつと小さな女の子がカーテンの隙間から顔を出した。その姿が男の脳裏に焼きついた瞬間、また声がした。

ニクイ、ニクイ、ニクイ。

男はしらずしらずにノミを放り投げ走り出していた。普段の男からは考えられない、とんでもない速さで。馬車にあつという間にたどりつくと男だつたものは、鍵の掛かった馬車のドアを力づくで、メリメリと開けていく。人の力ではない。異変に気づいた御者が「あつ」と叫ぶと急いで男を馬車から引き剥がそうとする。しかし、男から放たれた蹴りによつて、あつという間に吹っ飛ばされてしまう。起き上がれない。重症を負つたようだ。

ダン。突然銃声が響いた。

中にいたスキンヘッドのミシュリアーゼ家の護衛が撃つたのだ。

「ケイトお嬢様。お下がりください」

ケイトは、冷静に変わつていく世界を注視していた。

「ヴォーダル。何なの？革命でもおこつたといふのかしら。町の人

が私に関わりを持つとうとするなんて」

「お嬢様。そんな他人事ではいけません。どうやら……まずい状況のようです」

撃たれた男は立ち上がつた。護衛のヴォーダルは男の左胸から確かに血が滲んでいることを確認して、もう一度狙いを定める。今度は頭だ。

ダン。ダン。ダン。

男の本来の能力を超えたスピードに、弾があたらない。辺りがざわついている。みんな逃げ出している。積極的に助けようという人間はない。圧倒的なパワーで男はケイトを目指して向かつてくる。

「カガヤキノヨンセンシノマツエイメ」

末裔。何のこと。ケイトはさすがにまずいと思つたらしく、街の通りを走り出す。ヴォーダルは数発当てているはずなのに倒れない血まみれの男を啞然と見つめていた。が、男がケイトの逃げた方角へ素早く走り出すのを見て「しまつた」と軽く舌打ちすると男の後を追う。しかし追いつけない。そこで大声を出す。

「お嬢様路地裏にお逃げください。建物の間ならば大人は追つてこれないはずです」

これを聞いたケイトは急いで狭い路を見つけると滑り込むように入つた。

と、そこには3人の少年がすでに路をふさいでいた。

ケイトは後ろにいる背の高い一人ではなく、前にいる少年が目に入った。

栗色の頭髪をしたその子もこっちをじっと見つめている。

「おい。何者だ。どこのお嬢様だ。ここは使用禁止だぜ。このトツテル様とその仲間以外はな。おい。アレク何みつめあつてんだよ」3人の少年のうちの一人が言つ。アレク。あの子はアレクというのね。

「あつ」

ケイトは自分がどういつ状況に置かれているのか思い出し、絶叫する。

「奥に走つて——」

「おい。俺らは誰にも命令される立場にないぜ。ん?なんだ。ありやあー」

追つてきた血まみれの男がトツテルの視界に入る。狭くて入れないようだが、関節をゴキゴキいわせて壁を力で削るようにやつてくれる。インジーダも「逃げたほうがよさそうだな。普通ではない」と言つので、4人は一斉に走り出す。路地裏を抜けるとそこは大きな通りだつた。通りを全速力で駆け抜けしていく4人を不思議そうに見る大人たち。どうやら怪物はケイトだけを狙つてゐるらしい。

通りのような広い場所ではあつといつ間に追いつかれるのは目に見えていた。

「おい。速いぜ。あれは人なのか」

とトツテルが走りながら息を切らしている。

「少なくとも今は人ではないわね」

とケイトも必死に逃げる。

「おれたちなんで一緒に逃げるんだよ。あれはお前をねらつてんじゃないのかよ」

「やつと…やつとつかんだチャンスなのよ。ピンチはチャンスよ」「何いつてんだ。この女」

「つるさい。この男」

ケイトは興奮気味に走り続ける。これが生きてるってことなのね。人であつたものはもうすぐ後ろに迫っていた。

インジーダは突如止まつて後ろを向いた。ケイトがこけたのだ。無理もない。上品な靴は壊れやすい。立ち止まつたインジーダは指をはじくような仕草をした。

すると、突如、弾のようなものが、人の形をしたものをつけぬく。「インジーダ。ここで『指弾』を使うのはまずいぞ。教会のお膝元だぞ」

「しようがない。命には代えられない」

だが、やはり、怪物は動き続ける。インジーダたちは先頭を走つていたため助けに向かうには間に合わない。

と、ケイトの前に一人の少年が立つた。アレクだった。

アレクは両手を広げ「怖くないよ。大丈夫。僕は何もしないよ」と語りかかる。目は慈愛の光にあふれていた。アレクはこの怪物が哀れに思えてならなかつた。

男だつたものの凶暴性はその瞬間少し失われたらしかつた。アレクの前で立ち止まる。

だがそれもわずかな時間だつた。ゆっくりと片手を上にあげるとアレクめがけて振り下ろした。

「アレクーーー！」

トッテルが叫ぶが間に合わない。インジーダは懸命にケイトたちのほうへ走る。

ドドドドドド。

また銃声がする。今度は間隔の短い射撃音だ。今度、化け物は吹っ飛ばされた。また辺りに血が飛び散る。インジーダは銃音のしたほうを振り向いた。

そこには大きな銃を構えた真っ黒な司祭服を着た女がいた。

「下がりなさい。少年。女の子を連れて逃げるのよ」

アレクはケイトの手を握ると走り出す。彼女の手は冷たかつた。逃げる途中にアレクは女をきつとにらみつける。

女は肩をすくめて、何故?といった様子だ。助けたはずの少年ににらまれたのだから、それもうなずける。

さすがに石工の男は起き上がつてこなかつた。そして息絶えた。

死体を見つめる黒服の女は少し離れたところにいる4人に話しかけた。

「その昔。魔法の力が封じられた理由は知ってるかしら。何を突然というかもしれないけど。この力は魔法の呪いの一種に違いないわ。ああ。自己紹介がまだだつたわね。私の名前はラルガッソー。見てのとおり教会の人間よ」

「教会。しかも。武装教徒だな。銃の携帯を許されているとは。しかもかなり高い位だ」

インジーダが嫌悪感をむきだしにして吐き捨てるようになつ。

「あらあら。坊やといい。お兄さんといい。命の恩人に対する態度かしらね。ま。いいけどね」

女はタバコを口に加え、火をつけて吸い始めた。

「命を奪うことはなかつたのに。何故」

アレクは非難の目でラルガッソーセを見る。

「もう。こうなつては無理よ。人ではないわ。このケースは私も2例知つてゐるけど、助かつたものはいないわ」

「もし、この人の肉親でも同じことがいえますか」

ラルガッソーセは少しいらいらした口調でアレクに言い返す。

「そうよ。あたりまえじやない」

と、そこへヴォーダルが他の召使いをつれてやつてきた。

「お嬢様。ご無事でしたか。申し訳ありません。このヴォーダル一生の不覚。何はともあれ無事でよかつた。これにこりたらもう、屋敷の外に出ることをお控えください」

ケイトは途端にぶすつとして

「私帰らないわよ。だって、こんなに刺激的な世界がここにはあるんですもの。屋敷の中なんてここに比べたら、地獄みたいなどころよ」

「お嬢様。またそのような……」

ヴォーダルは閉口している。

「はつはつは。いい根性ね。お嬢様。鬼のヴォーダルと呼ばれた男も形無しね。くつくつく」

とたんにラルガッソーセが口をはさむ。ヴォーダルは初めてこの女がここにいるのを気づいた。二人は知り合いらしかつた。

「ラルガッソー。まだ教会で働いていたのか」「ははは。ずいぶんな挨拶ね。もつともあんたはもつ教会の人間じゃないから、もう上下関係もなにもないけどね」と軽蔑したように鼻をならした。

インジーダとトッテルはこの隙にいつの間にか消えていた。アレクは彼らが、いずれ僕をどこかで置いて住処に帰るだらうことは知っていた。インジーダのぶっきらぼうな、そしてトッテルの無邪気な優しさを思い出して、彼は目頭が熱くなつた。

（ありがとう。二人とも……）

ケイトもそれに気づいたらしい。

「あれれ。坊や。アレクつていつたつけ。お仲間さんいっちゃんね。ねえ。良かつたら家にこない？招待するわよ。ケイト様のお友達第一号としてね。2号と3号は逃げちゃつたけどね。いいでしょ？ヴォーダル」

「はあ……。しかし旦那様が何といわれるか。素性のわからない者を……」

「アレクは私の命の恩人よ。それなら文句ないでしょ？ミシリアーゼ家は恩知らずと罵られてもいいの？」

「あら……。うれしい私も招待してもらえるのかしら」

ラルガッソーが嬉しそうに言つ。だが、ケイトとヴォーダルはそんな彼女を無視して話を進める。ついにヴォーダルはアレクを家に上げることを承知した。

「わかりました。お嬢様」

「さあ、行きましょう。アレク」

アレクはじつと死骸を見ると軽く手を合わせた。そしてケイトに「いえ。僕は行かないといけない所があるので、いけません。すいません」

と告げる。彼女はきょとんとして「遠慮するんじゃないわよ」といつて笑つてアレクの手を強くひっぱつた。「痛い。痛いよ」アレクは声に出すが、格好の遊び相手を見つけたケイトの耳には入らなかつた。

かくして、アレクはミシコリアー・ゼ家の門をくぐるにこなつた。

残されたラルガッソーの独り言。

「なんでよ。私は命の恩人じゃないつていうの?ふー。(たばこ)をふかす)まあ、少年の後でも追いますか。あの指から放たれたもの。あの少年、『覚醒者』かもしれないからね。お仕事。お仕事。やれやれだわ」

グロッサの苦悩

「流れ弾にあたつて、けが人が4人でした。その他に家が半壊しています。馬車が壊されました。そして、お嬢様はお友達と称して少年を家に招いて一緒に授業を受けておられます」

屋敷の奥のグロッサの執務室。ヴォーダルが直立不動で椅子に座るグロッサの前に立つていて。グロッサは机をコツコツと叩き、「教会にもしつかり、原因究明と補償をさせてやらねばならんな」「しかし、お嬢様を助けたのは教会のものですが……」

少し狼狽するスキンヘッドの男。だが、すぐに冷静さを取り戻す。ミシユリアーゼ家の当主は強い口調で、

「それでもだ。適当にあしらつてその子供は追い出せ。少し金でも持たせてな。それとケイトに北方の珍しい蝶が手に入つたので贈つておけ。何があるかわからんから今日だけは絶対に外に出すんじゃないぞ」

ヴォーダルは深く一礼して、部屋をあとにする。

一人考え込むグロッサの顔には苦悩のあとがみえる。『覚醒者』か。監獄に閉じ込められることだけは絶対にさせたくない。だからこそ、ケイトを深窓のお嬢様にしてきたのだ。何事も起らねばいいが。武装板機卿もいよいよ本格的に動き出すな。難問は山積しているが、大丈夫だ。必ずやりとげてみせる。

屋敷に戻ったアレクたちはなんとも平和に地理の授業を受けていた。バキラ老といわれる、おじいさんが全ての科目をケイトに教えていた。

「いいですか。お嬢様。おつと、そしてアレク。このアルバニア大陸は5つの町で構成されています。最北端にあるガルシャ・アルメイラ、中央の首都メインドラジアス、芸術の町アルデーヌ、商人の町ゲルドクル、農民の町ランデンツサです」

「ガルシャ・アルメイラ……」

とアレクは思わず声をもらす。それを隣の席にいたケイトは聞き逃さなかつた。

「どうしたの？ アレク？」

「行かなくちゃ。僕行かなくちゃ」

「どこへ？？」

「ガルシャ・アルメイラさ」

「そうなのね。なるほど若い少年はこうでなくてはいけないわ。とにかくガルシャ・アルメイラに行きたいのね。なぜか聞くまでもないわね。あなたは生粋の冒険家じつとしていることなんて絶対に無理な話だわ。だからいかなくちゃならないのね」

「いや。そうじゃないよ。話せば長いんだけど……」

「なによ。違うの。まあいいわ。私が連れて行つてあげるわ。友だちつていうのは助けあうものよ」

「え？ ほんと！ どうやって？」

アレクの顔にほんのりと赤みが戻る。そんなに喜ぶと思ってなかつたケイトはばつが悪そうに、

「え？ うん……。それは、これから考えるわ」

「そう……」

一気にトーンダウンするアレクの声。

バキラ老が一生懸命口をはさむ。

「いけませんぞ。お嬢様。グロッサ様がお許しになるはずがありますせん」

「またお父様なのね。あーつもつ。いい加減にしてほしいわ。いつつもお父様が、お父様が、まつたく……もつ」

教科書を老人のほうへ放り投げるケイト。と癪癪を起こしかけたところでぴたりと止まる。手を口にあてて、しのび笑いをすると「わかつたわよ」と言つて教科書を拾いに行く。

バキラ老は教科書を拾いケイトに渡すが、ケイトはそつと目を逸らして受け取る。（また何かたくさんでいますな。お嬢様。困つたものだ）

その夜、アレクは寝室をあてがわれた。（今日は敷布団もふかふかだ。すごい。やつぱり身分が違うんだなあ。こんな生活をしている人もいるのかあ。ああ……だめだ、こんななんじやあ、ガルシャ・アルメイラにたどり着けないや。明日は朝一番に出て行こう。これ以上あの子を巻き込んじやだめだ）そんなことを考えながらアレクは眠りについた。

それぞれの夜

通夜が行われている。家族のすすり泣く声。怪物と化した石工の葬儀だつた。だが、遺体さえ棺には入つていない。教会による詳細な検査が行われるらしい。薄暗いろうそくの明かりがぽつんと2本、棺の横に置かれている。町の名家ミシュリアーゼの娘を襲つたことで家族以外の参列者は誰もいない。と、そこに司祭が入つてきた。せつかくの自慢の赤毛も暗いせいか色あせてみえる。

「司祭様ありがとうございます。わざわざきてくださいて」

未亡人が司祭に挨拶する。

「何の。この度はお悔やみ申し上げます」

「主人はきっと病気だつたんです。せめて人を殺めなかつたのが救いです。どうもありがとうございます」

「おそらく邪惡なる呪いの影響です。日夜、呪い解く方法を探しているのですが……。今回も命を奪うしかなかつた……。これは教会からのせめてもの補償です」

といつて、これから先、未亡人と子供たちが生きていくのに必要なお金には十分なほどの金貨をそつと婦人の手に握らせる。

「こんなに……。ありがとうございます。シルバ様」

涙を流し喜ぶ家族たちを残して、シルバは次の慰問先へ向かうため家を出て行つた。

その夜ケイトは高熱にうなされていた。いい感じだわ。こうして、体の力がわいてくるときに“あの力”がでてくるのよ。さあ、こんな時のために力を操れるようにしてたんだから。まあ、夜が明けるまでに変われば十分だからね。待つてなさいよ。アレク。

部屋の外のドアにもたれかかるようにヴォーダルが座つている。

お嬢様。今度という今度は、外の危険さを、わかつてくださるといいのだが。この私がドアの前にずっといれば安心というものだろ

う。いつも、抜け出される時はやはり刃使いが甘いからだろう。一度、頑固な若者がいたな。「自分は寝てません。たしかにお嬢様はここからでません」と来たものだ。ここは3階だ。窓はすでに前科つきだから開かないようにしてある。他にどうやって出る方法があるだろうか?否。ないのだ。

夜が明けた。ケイトの身の回りの世話をする女中がドアから中に入つていく。

「キヤー。お嬢様がいません」

「なんだと」

ヴォーダルは信じられない氣持ちで

「もつとよく探すんだ。棚はどうだ? ベッドの下は?..」

女中はただただ首を振るばかり。

「そんな馬鹿な。くそ。屋敷中を探せ」

ヴォーダルは歯噛みしながら周りに集まつてきた召使に命令した。その時ドアの隙間から一匹の蝶がひらひらと外へ飛んでいった。

「あら? お嬢様の蝶が逃げだしたのかしら。せつかくの旦那様からのプレゼントなのに……」

と女中はつぶやいた。「おい。お前も探せ」ヴォーダルから声がかかると女中も急いで捜索隊に加わった。

「さあさあ。もう行きな」

「ケイトさんによろしく伝えてください。あつがとうございました。お世話になりました」

アレクがちよび屋敷の門を出よひとしましたといだつた。一羽の蝶がひらひらと飛んできた。門番は

「なんだ。邪魔な虫だな」

といつて、払い落とそうとする。

「やめてください。虫だって懸命に生きてこなんです」とアレクは門番の足にしがみつぶ。

「ちつ。わかったよ。じゃあな」

蝶はアレクの周りをぐるぐると回ねてアレクの歩く方向につこう

く。

「なんだい。蝶々さん。どうしたの？」

蝶はアレクの肩にそっと止まった。アレクはそっと歩くようにして立つて、蝶のしたいよつとさせてあげた。これからどうしよう。地理的には次はアルテーヌの町を田指すのがいいのだろう。アレクは道行く人にアルテーヌ行きの旅客馬車にどこで乗るのか尋ねて回つた。そしてようやく馬車の出る駅に到着した。駅といつても一本の柱が申し訳なさそうに立つていて、ただただ。しかし、発車時間までだいぶあるらしい。駅には誰もいなかつた。

ポン！

音がしたかと思つと、そこにはケイトが立つていて、満面の笑みでスカートの埃を払い、

「アレク。2度もあなたに命を助けられたわね」

と、いたずらっぽく言つ。

「え……どういひことだい。いつたいてからあらわれたんだい？」

「ふふふ。せつせつの蝶どこにいったのかしら」

「あ……あれ？どこにいったのかなあ？」

「ふふふ。まあいいじゃない。晴れて一人で旅にでれるつてわけよ。楽しいじゃない。わくわくするじゃない。さて、どういひ事情か、馬車の中でもうつべつときかせてもらひわよ」

追い詰められるインジーダ そしてアルテーヌへ

インジーダたちは追い詰められていた。住処はとうに包囲されている。

「ここは完全に包囲されているわ。まだ子供の命までは奪いたくないわ。おとなしく出てきなさい。猶予は10分。それ以上は待てないわよ」

武装枢機卿のラルガツソーが大声で盗賊団に呼びかける。数人の黒の背広の男たちも後ろに控えている。中には防弾チョッキのような硬い服を着込んでいるはずだ。

「インジーダ。お前だけは絶対に逃がしてやるからな」

「気持ちは嬉しいが、皆は裏道から逃げる。俺は捕まつたやつらを助けに行く」

「インジーダ。捕まつた仲間はしようがないよ。僕らはまだ子供だし、大丈夫さ。それに……こここの場所だつてあいつらが」

「馬鹿野郎！！ 犯罪者が送られるビジュリアズ監獄は、そんな甘いところじゃない。こここの場所だつてどうやってばれたかまだわからぬいだろ？が」

一喝するインジーダ。早く行けと、手で合図する。

皆は盗品をもてるだけもつて裏口に向かう。トシテルが近づいて言ひ。

「こつちのことは任せろ。裏口のあることは数人にしか教えてないから大丈夫だと思う」

「頼んだ。俺の帰るところはしつかり残しておいてくれ」

二人はがつちり握手して、別れた。インジーダは窓からサルガツソーたちをじつと見る。

さて、ここから見えるのは6人か……。やつらが俺を殺すつもりなら、無理だろ？ だが、生け捕りにしようとしているのならばチヤンスはある。インジーダは盗んだ馬に飛び乗って、敵の包囲網を

突破しようとした駆け出した。

「「」がアルデーヌ……」

アレクは思わずつぶやいた。ランデッサやゲルドクルのような整然とした建物はこの町には皆無だった。奇妙に曲がった屋根。赤、茶、黄、青など、色とりどりにペンキで塗られた家々。くねくねとした道路。通りのあちこちには、みすぼらしい服装をした男女の群れが絵を描いたり、楽器を奏でたり、歌ったりしていた。その喧騒たるや、ケイトをして「つるさい町ね」といわしめるには十分であった。そういうえば町に入るときの看板に『芸術の町アルデーヌへようこそ!』と書いてあつたのを思い出した。ここからは高速の鉄道が首都メインドラジアス、そして、ガルシャ・アルメイラへ向けて伸びているのだった。しかし、この列車に乗れるのは「」く一部のお金もちだけだった、

「アレク。歩いていくのよりも何倍、何十倍も列車は速いわよ。とりあえず手持ちにいくらあるの?」

「50ゼルトくらいだよ」

アレクは革袋の中身を確認しながら言つ。

二人は列車の駅に到着すると鉄道員がケイトの身なりをみて、愛想よく対応する。

「お嬢様。どちらまでお行きになられますか? 親御さんはどちらに?」

「親御さん? 私たち一人だけよ」

「なるほど。よろしいです。それでは乗車券はお持ちですか?」

「いくらするの? 乗車券」

「私どもはお子様であるうと、犬であるうとお金さえ払つてもうれ

れば乗せますよ。ただし、お金がなくては……

「で、いくらなの？」

「3万ゼルトです」

「3万……」

ケイトは驚いた。無理もない。せつと手持ちのお金の600倍だった。

なるほど。これは少々やつかいね。こんなにもお金が必要になるなんて、さすが世界ね。いいじゃないの。わくわくしてきたわ。どうやって、お金を稼げつかしり。

とりあえず一人はこの日、泊まる宿を探すこととした。しかし、子供の二人組みであるため、トラブルを恐れて泊めてくれるところはなかなか見つからなかつた。そんな一人がお腹をすかして歩いていると、親子らしき一人が歌つている。

遙かな昔 魔法の時代

神は大陸の人間を従えようと
人との間に5人の子を作つた

ケチャラン 雄々しき男

ミネラン 魔法の天才

ラミラリア 癒しの祖

キューゼ 盗賊王

そして神に乗つ取られた人間

ゲムネリア

悲しい戦いが始まる

神は人間を支配しようと想えていた

神と人の子である5兄弟姉妹は人の味方となつた
しかし末子ゲムネリアは神の器となり

戦いは始まつた

世にいう 魔封大戦である

結果神は敗れ

封じられた

そして、魔法も消えた

大人は美声でそこまで歌いあげると、たちどまつて聞いていた――

人を見る。

「やあ。旅人さんかな。わたしは吟遊詩人のビジエネイというものだ。息子のアシドラルクだ。ほら挨拶しなさい」

ビジエネイに促されアシドラルクはふてくされたように「よろしく」と言つた。

ケイトは疲れきつて小声でぶつぶつといつてゐる。アレクも簡単に挨拶をすませると、思い切つて聞いてみた。

「あのビジエネイさん。僕ら今日、一晩泊まるところを探しているのですが」

ビジエネイは少し驚いて、

「え? 一人だけの旅なのかい。危ないことするねえ。なんなら、うちに泊まつていきなさい」

「え? いいんですか?」

「なあに。気にするな。旅人は大事にするのが吟遊詩人の教えた」「ありがとうございます」

アレクは頭を下げた。ケイトは疲れきつてゐるのか何もいわない。ビジエネイの家に着くと、妻のイルトムーンが出迎えた。

「おやおや。小さな旅人ですこと。よろしくね。アシドラルク。お客様の寝床の準備して頂戴。それが終わったら料理の材料を買いにいってくれるかしら。お嬢さんはその格好は目立つから着替えましょう」

ケイトはぐつたりしてゐる。宿屋の主人との口論で体力を奪われたらしい。小声でぶつぶつといながら、奥の部屋に消えていった。アレクは居場所がなくまごついていると、アシドラルクが2階の寝室から降りてきて、

「ねえ。君。買い物一緒にいつてくれないかい。荷物もちでいいからさ」

と声をかけた。

「うん。手伝います」

二人は市場へ向かつた。

道中、アレクは旅の目的地と鉄道の乗車券がいることを話した。

「へえ。 そうなのかい。 そういえば知っているかい? 明日行われる手品大会で優勝すると鉄道の乗車券が4枚もらえるらしいよ。 まあ、どうしようもないけどね。 ははっ。 そうだろ。 うちの親父はおどぎ話を歌うしかできないしなあ。 僕はもつとちやんとした仕事につきたいよ。 人の役にたつ仕事をね。 おつと親父には内緒だよ。 あれでいて、自分の仕事に誇りをもっているんだからね。 始末に負えないや。 君のお父さんは何をしているの?」

「父はないよ」

「そうかい……」

アレクはさっそく帰つて寝室でケイトと一人になると、手品大会のことを話した。

ケイトの能力

案の定ケイトは飛びついた。

「いいじゃない。出ましょう」

「ご飯を食べて元気が出てきたらしい。ケイトは目を輝かせながら言つ。

「大会によつて生まれる、愛、友情、好敵手。素晴らしい展開ね。なんて面白いの。世界つて素晴らしいわね」

「そ・・そ・う・だ・ね」

アレクはケイトのいつもの世界愛、もつとも屋敷の外の世界のことだが、に軽く相槌をうつて、疑問をぶつけた。

「でも、どうやって優勝するの？」

「ふふふ。私に秘策があるわ。任せておきなさい」

こうして二人は眠りについた。

朝二人はビジネイさんにお礼を言つと手品大会が行われるという旧闘技場に向かつた。この地で昔は様々な見世物が行われていたらしい。もつとも最近では、詩人の歌会などに使われるのみだった。今回は町長の発案で手品大会が開かれることになつたらしい。

「エントリーされる方は、番号札をお持ちください！――！」

なんと出場者はケイトをいれて10人だつた。企画倒れの予感が漂う中、アレクはケイトの助手として、控え室にいた。

そしていよいよケイトたちの番がきた。

ケイトはアレクを連れだつて、大舞台に立つた。一斉に観客の视线が集まる中、ケイトはアレクの胸に手をあてて、何事か念じるようになつて、ぶつぶつ言いながら、目をつぶる。

「おいおい。子供が何やつてくれるつていうんだ。ひつこめー」

しかし、その声はいつしか喚声に変わつた。

様々な野次が飛ぶ。

しかし、その声はいつしか喚声に変わつた。

「おいおい。男が一人になつたぞ」「少年が二人に。何のマジックだ」「いいぞー」

そんな声が当たりを埋め尽くした。そして、そのまま、一人のアレクは一礼して舞台を降りた。

「優勝は……。ケイト＆アレクコンビー!!!!」

司会役の男が高らかに宣言した。

「やつたわ。アレク」

元の姿に戻っていたケイトはアレクと抱き合って喜ぶ。4枚の乗車券がその場で渡されると一人はそそくさと会場をあとにした。会場から出るとアシドラルクが興奮気味に一人を待っていた。「びっくりしたよ。一人は魔法使いだったんだね。あれは絶対に手品じゃないに決まっている。ねえ、そうだろう?」

「魔法であろうとなかろうどどっちでもいいのでなくて?私たちは目的のために手段を選ばないわ」

「是非、僕も一緒に旅に連れて行ってくれないかい?後生だ。頼むよ」

「アレク?どうする?」

「お父さんとお母さんは心配しないのかい?」

「なーに。飛び出すさ!..」

「いい心意気ね。気に入ったわ。アレク!!!連れて行きましょう」

「僕にはそんな簡単に家を飛び出せる理由がわからなによ」

アレクは怒りを含んだ悲しげな表情で言つた。

アレクの怒りなど見たことがなかつたケイトは困惑していた。何か悪いことしたかしら、どうやら世界つてのは思つたより複雑なのね。アシドラルクはしょんぼりしている。

「わかつたよ。父と母に相談してくるよ」

そう言うとアシドラルクは家に早足で向かった。

「絶対待つてくれよ」

そういう残して。

アシドラルクの旅立ち

アシドラルクの家では異変が起きていた。ビジェネイの妻イルトムーンが暴れだしたのだ。最初、ビジェネイは一種のヒステリーかと思っていたが、違うらしい。まるで目に正気の色はなかった。イルトムーンは服などが入ったタンスを持ち上げると、ビジェネイ向けて投げつける。と、そこへアシドラルクが帰ってきた。

「母さん。何してるの！？」

いつもの母の姿とは似ても似つかない髪を振り乱し、暴れる姿を見たアシドラルクは叫んだ。

父はタンスの下敷きになっていた。アシドラルクに

「清めの歌を歌うんだ」

と言った。アシドラルクは昔自分の歌を聞いた老人の難病が治つたことを思い出した。だが、あれ以来、父はアシドラルクに強く、その歌を歌うことを禁じていた。それを今になつて歌えとは……。戸惑っているアシドラルクに選択の余地はなかつた。歌い始める。

麗しの祖 ラミラリア

その美しき目に射抜かれた病人たち
皆力あふれるたくましき体に戻り
緑の大地を踏みしめ歩きはじめる

「うおおおおお

それを聞いたイルトムーンの目からは大粒の涙が出てきた。滝が重力に流されるように涙も頬を伝つて地面に落ちる。苦しみだすと、口から血が出てきた。舌を噛み切つたのだ。

「母さん！？」

アシドラルクは父をタンスの下から助け出すと、今度は母に駆け寄る。イルトムーンはその場に前のめりに崩れ落ちた。

ビジエネイは意を決した顔つきでアシドラルクに告げた。

「私たち一族はラミラリア様の子孫と父、お前の祖父が言つていたのを父さんは思い出したよ。それならば、母さんの突然の変容も納得がいく、これは『呪怨病』に間違いない。決して、子孫にはからないうが、周りの人間に感染するという神の呪いらしい。その間に魅入られた人間は常人にはない力で子孫の命を狙うという。だが、心配するな。私たち一家は幸いなことに癒しの術を持っている。歌だ」

アシドラルクは初めて聞く話に戸惑いながらも、熱心に聞いていた。ふと思い出して、自分にもアレクの母が救えるかもしれないと思つた。事情を話すとビジエネイは悲しそうに首をふつた。

「呪いの病のもう一つ『呪眠病』だな。神が封じられて眠りについたのは知つているね？その影響を人々が受けるのだよ。つまり、彼が母親を治したければ神を復活させるしかない。だが、それはメインドラジアスの皇帝が許すまい。アレクくんには残念だが、諦めるしかない」

「父さん。僕アレクの手助けがしたい」

ビジエネイは渋い顔をしたが、アシドラルクの燃えるような瞳に心動かされた。危険な旅になるだろう。命を失うかもしれない。だが、困っている旅人を助けるのは家訓だつた。

「わかった。いつておいで」

「ありがとう、父さん」

アシドラルクは喜んだ。しかし、彼は心配そうに母の姿を見つめる。

「大丈夫だ。母さんのことは任せろ」

ビジエネイは力強く言つと、アシドラルクの肩を叩いた。少年は豎琴を持って飛び出すと駅に急いだ。

一方、駅では騒動が起っていた。無賃乗車をしようとした子供が見つかったのだ。アレクとケイトは何事だろうと駅のがつしりとした門から小さな背で伸び上がってみてみると、2～3人くらいの駅員に連れられて一人の清潔感のない少年が駅門にやつてきた。

「俺はガルシャ・アルメイラに行きたいんだ！！離せ」

なおも抵抗しようとする少年の姿を間近で見た二人は驚いた。向こうもこちらに気づいたらしい。きまり悪そうに大人しくなると駅の門の前で放り出される。彼は立ち上がると、アレクたちに向直り「よう。久しぶりだな。アレク。それからお嬢さん」アレクは嬉しくなつて少年に抱きついた。

「インジーダ！！」

「よせつ。暑苦しいだろ？が」

インジーダはアレクを振りほどくと周りの田を気にして駅門の前から少し離れた位置にアレクたちを誘うと早口にまくしたてた。「実は仲間が教会に捕まつてしまつてな。教会は浮浪児たちをガルシャ・アルメイラに送るのが常だ。きっとあいつらもそこに送られたはずだ」

アレクはインジーダの姿がとても汚れているのを見て、教会に追われているからだと気づいた。ケイトと一緒にいるのを不思議に思つたらしくインジーダはケイトを指指して

「これはどうしたんだ？」

と聞いた。ケイトはこれ呼ばわりされて少々機嫌を損ねたらしかつたが、アレクの説明を聞いているインジーダを懐かしそうに見ていた。

友達2号と出会えるなんて、ついてるわ。なんてことを考へているらしかつた。インジーダはアレクたちが4枚の列車の切符を持っていることにとっても喜んだ。

「おお。これさえ、あればガルシャ・アルメイラまでひとつ飛びだせ。まあ、どうやって手に入れたかは車内でゆっくり聞かせてもらうことにして、俺も連れていってくれないか？」

アレクが快諾するとインジーダはアレクの髪をくしゃくしゃとかき回すとうれしそうにした。駅門に向かおうとするインジーダにアレクは「実は…」といって、もう一人待つていることを伝えた。インジーダは急ぎたいようだが、アレクがあと少しだけというと渋々頷いた。

そして、時がたつた。

アレクたちが駅の門に向かおうとすると、遠くから「待ってくれ」と声が聞こえてきた。アレクたちが振り向くとアシドラルクだつた。

息をきらせながら走ってきたアシドラルクは両膝に手をあてて大きく深呼吸するとアレクに「父さんも許してくれたよ。一緒に行こう」アレクも頷き返す。

「うん！」

こうして、4人はガルシャ・アルメイラへ向けて旅立つた。運命の歯車は彼らを否応なしに引きつけていく。

アレクたちが列車に揺られているころ、アルデーヌの町から電報を打つ者がいた。旧闘技場で手品大会を見ていた教会の牧師である。名前を“聖なる蛇”を意味するジャロボロスと言った。数年前にアルデーヌにやってきてから布教活動や学校を開いたりして地域に貢献してきた彼だったが、今日の手品は不信に思うところがあったのだ。“魔法”的存在はメインドラジアスの神学校で学んだが、実際見るのは初めてだった。いや、あれが魔法かどうかさえ判別がつかなかつた。魔法は危険な予兆というのは何度もかつての教師パルモンテから口をすっぱくいわれていたものだから、今回の件を報告しようとしていたのだ。

教会の自室で一人発信機と格闘していたジャロボロスだったが、ようやく説明書を見て、やり方がわかつたらしい。「なるほど、こをこうして」などと言いながら、機械を操作する。なにしろ電報を打つ時はそれほど緊急の時と決められていたのだから。

最新の技術で各町に一つずつ配備されているものなのだ。

アルデーヌの町はランデッサのように町会というものがあつて住民たちが自治をしていた。そこにメインドラジアスから派遣された教会員という様子であつた。最初は人々の輪にとけこむのに苦労していたジャロボロスであつたが、最近は町会のイベントなどに頻繁に招かれるようになつた。

芸術が盛んな町で信仰一筋のジャロボロスには物足りなかつたが、大きな問題もなくうまくやつてきた。それが、今日魔法らしきものを使う少女を見てしまつとは。ジャロボロスの動搖は大きかつた。メインドラジアス宛に電報を打ち込む姿は教本を読む姿勢とちつとも変わらなかつたが、ひどく疲れを感じた。

『アルデーヌの手品大会で魔法らしきものを使う少女を見た。もしかすると重大な案件かもしね。彼らは4枚の列車のチケットを

使って北に向かつた『

ここまで打ち込むと、すでに夜になっていた。この頃になつて、
ジャロボロスは自分のしていふことがひどく馬鹿げたことのよう
思えてきた。

手品大会で手品を披露した異国の大道芸人だつたのではないのか
？と思い始めたのだ。だが、あんな手品は見たことも聞いたことも
ない。それは自分の無知ゆえかとも考えた。その証拠にアルデーヌ
の町長は笑つていたではないか。だが、あんな子供が大人もタネが
わからぬ手品を行なうとは考えにくい。いろいろ考えているうちに
夕食の用意ができると妻の呼ぶ声がする。とりあえず電報を打つた
のだから自分の役目は果たしたと思い、気になりながらもジャロボ
ロスは食卓についた。

メインドラジアスの会議

ジャロボロスの放った電報により皇帝の住む都市メインドラジアスでは会議が開かれていた。壯麗な装飾に彩られた部屋には数人の男女が集まっている。アルデーヌの巨匠ブラグトナンの絵画、ガルシヤ・アルメイラの石工による幻想的な動物の彫刻。過去の遺物と一線を画すものばかりだった。神の文明を否定し、自らの手で一から作り上げた文明を決して過去に逆戻りさせてはならない。会議に参加している者は皆同じ志をもつているらしかった。魔法を使う子供の出現は看過できない問題であった。一人の髭を顔いつぱいに生やした男（髭のせいか年齢はかなり老けて見える）が重々しく口を開く。

「皆の者今日集まつてもらつたのは他でもない。実はかねてからの懸案事項だつたゲルドクルの盗賊たちの頭目がまだ捕まつていないことには加えて、アルデーヌでまたもや覚醒者が現れたという情報が入つた。さらに悪いことに覚醒者はどうやら合流して鉄道に乗つたらしいのだ。彼らの目的が何かは知らぬ。だが、こちらに向かつている以上見過ごせない問題だ。早急に武装教徒を派遣する所存である」

言い終えると今度は若い不可思議な面を被つた男が口を開く。その声はまだ若く、活気に溢れている。

「もちろんヒロワインシーの復活は防がなければなりません。しかし、何故覚醒者の子供がここに向かつているというだけで私が率いる皇帝親衛隊と同じく殺傷許可を与えられた武装教徒が出るのか理解できませんな」

しかし、仮面の男の隣から反対意見が出る。落ち着いた教養のある女性だ。年は40代だったが、30代といつても十分通用する外見だ。

「ピンスラー殿。魔法というのは強力な存在です。今はまだ相手が

子供だから良いですが、大人になるにつれて魔法の力は増すと言い伝えられております。私も何も若い子供の命を奪おうとも思いません。ただ、我々が正しい方向に導くことも重要なのではないでしょうか？」

ピンスラーと呼ばれた仮面の男は降参とばかりに手を上げる。しかし、髭の男は意見が違うようだ。

「危険だ。生かしておくと何が起きるかわからぬ」

ピンスラーはつぶやきにも似た男の言葉を聞き逃さなかつた。「危険なものがあるとすれば未だに邪教の灯火が消えぬことですな。奴らは今もガルシャ・アルメイラで隠然たる力をふるつていると聞きますぞ。教皇陛下」

教皇である髭の男は痛い所を突かれたらしく、ピンスラーをにらみつけると諭すような口調で言つた。

「あれは力だけで解決できる問題ではない。むしろ子供たちとやらを接触させないためにも奴らの希望となるであろう子供たちを討つべし」

「ここまで強硬に言われるのには何か別の理由もあるのではないかですか？教皇陛下？」

ピンスラーはなおも言葉を続ける。

「我々に何か隠しておられる？」

教皇は至つて冷静に動搖を隠すと一笑に付した。

「そのようなことはありえません。よろしい。そこまでいふならば貴君の皇帝親衛隊で子供たちを生けどりにすればよろしい」

「ご理解感謝します。教皇陛下」

ピンスラーはつやうやしくお辞儀をすると部屋を出て、自分の屋敷に戻ると、部下を呼び言つた。

「メインドラジアスで列車の検査を行なう。皇帝親衛隊50名を出しますぞ」

「ハツ」

部下は急いで命令を伝えるべく走つていつた。一人残されたピン

スラーは『なんで、子供相手に50名も出さなければならぬかね。しかし、まあ念には念を入れてということだ』と一人考へ、制服を謁見用から戦闘用に変えると屋敷を出た。

その頃アレクたち一行は列車に揺られ、真剣な表情で話しあっていた。手品大会の賞品である切符は三等席のものだったが、それでもずいぶん立派で革製の座席に四人はどつかりと腰を下ろしていた。周りの大人们は何者だろうとばかりに子供たちのみの一団を見つめるが金持ちの良家の子女だろうとばかりに片付けた。実際乗っている者は皆それなりに裕福な人々であつたのだから。ただ、ケイトはともかく他の三人は身なりも悪かつたので、少々疑問を持つものもいたが、皆他人には無関心だった。

「インジーダ。トツテルたちは無事なのかい？」

アレクが心配そうに元盗賊の頭目に聞くと、インジーダは悔しそうに三言位悪態をつくと、アレクが泣きだしそうな顔で見つめるので仕方なく答えた。

「わからん。ただ捕まつたことは確かだ。約束の場所に現れなかつた。俺らの中に内通者がいたんだろう。隠れ家の裏口がばれていたらしい。トツテルは違うとして、タルパムか。それともユジンスキか。くそ。なんだつて俺たちを裏切るような真似なんか」

アレクは優しくインジーダをなだめる。目は慈愛に満ち、いたわるような態度に他の二人は常人ならざるモノを感じた。アレクの言い分は「裏切り者なんかいない。周りは全て調べ尽くされていたんだよ」というものだつたが、インジーダにいわせると「あの通路は長いこと使われていなかつたのを自分たちが見つけたのだ」と言いはつた。

ケイトといえば、この問答に早々に飽きたらしく、窓の外の移りゆく景色を身を乗り出すばかりに見つめて一人幸福感にひたつっていた。アシドラルクがふいに歌いだす。

世界を変える戦士たち
遠方の地より北へ向かう

周りの乗客たちが一斉に非難の目を四人に向けたので、アシドーラルクはアレクによつて演奏を止められた。

「だめだよ！！」アシドーラルク。列車の中では静かにしなきや
アシドーラルクは落ち込むと残念そうにケイトと景色を見始めた。
と、思い出したように吟遊詩人の子供はアレクに声をかける。

「僕の父さんがアレクのお母さんの症状は呪眠病つてものらしいつ
ていつてたよ」

「そりなんだ。眠り病つて聞いていたけど、そういう名前もあるん
だね。ありがとう。アシドーラルク」

満面の笑みをみせるアレクに彼は照れると、また景色を田で追つ
ことを始めた。

「このあたりには人は住んでいないらしく、ブナの森やイチビ、ゲ
ンノショウコの雑草が僅かに生えた草地が延々と続いていた。旅を
始めたばかりの二人にとってその景色は田で追うのも大変だつたが
華麗な宮殿に勝るとも劣らぬものだつたに違いない。そして時が過
ぎていつた。そして、まもなく終点ガルシャ・アルメイラの途中の
都市、首都メインドラジアスに着くと車掌が言つて回つた。

メインドラジアス通過

ついにアレクたちは都まできたのだ。あたりを囲む高い建物の数々を窓から見てアレクたちは驚いた。建物を見て、人々を燃料にして燃え上がる炎が空の頂上を目指して、どんどんと成長していく心持ちがしていたインジーダは自分がこの地に帰ってきたのだと不本意ながら郷愁に沈んだ。その様子を見たケイトはインジーダが黙っているのを見て、田舎者が建物の群集に驚いているのだと勘違いして、自らも初めてであるにも関わらず、物知り顔で書物で読んだ知識をアシドラルクに教えるのであった。アシドラルクは根が素直であつたし、都會というものに一層の憧れも強かつたので、そんなケイトを頼もしくうつとりと景色とともに見つめていた。一方、アレクは少し異変を感じ取っていた。何やら物々しい姿の大人の男たちが、列車の窓を覗きこんでいるのを見たからだ。

「ねえ、インジーダ。あれ見てよ。インジーダを追つてる人たちかな？」

自分が追われてるとも知らず、インジーダに気をつけるように話しかけるが、インジーダは感傷に浸つてしまつて、どうしようもない。危機はすぐそこまで迫つていた。

窓から大きな顔が車内を見していく、アレクはとうさに窓についていた日除けを下ろすと皆に隠れるように指示した。皆は何やら訳もわからずとにかく頭を引っ込めた。すると、外からコツコツと窓を叩く音がする。それとともに大きな声が4人に聞こえてきた。

「おい。開ける。皇帝親衛隊だ。窓を破るぞ」

アレクたちは声を潜めていると、外では何やら言ひ争う声が聞こえてきた。

「ちょっとお待ちください。これは高級製のガラスです。壊されてしまません」

「駅長。お主、我々を誰だと思っている。皇帝陛下の身辺を警護す

る皇帝親衛隊だぞ」

「重々承知致しております。ならば是非中に入つて確かめたらいいではないですか」

「なにつ。我々がメインドラジアスを離れられないのを知つての言葉か！」

「ですから何度も申しておりますとおり、列車は私の許可がでるまで動きませんので、安心して乗つてください」

「うむ。そこまで言つならばな。あつピンスラー隊長。子供たちは見当たりません」

靴を踏みならす音がカツンと響いた。敬礼したのだ。ピンスラーはまさか部下たちが、このようないい加減な心構えで任務にあたつているなどと露ほども思わず、「うむ。」と「苦労」と言つて通り過ぎると次の車両へ歩いていった。残つた隊員たちは「どうする？」などと言つてささやきあつてていたが結局誰も中に入りたがらなかつたので、閉口した。

アレクたちはじつと身を座席の下に隠すようにして隠れていたが、アシドラルクがついに耐え切れずにくしゃみをしてしまつた。

「ヘクシヨン！……！」

「おい。今子供のくしゃみが聞こえなかつたか？」

「子供のかどうかはわからんが確かに聞こえたな」

「おい。駅長。中に入つて確かめてくれぬか？」

一刻も早く列車をスタートさせたい駅長は快く「わかりました」と言つとさつそく中に入つていった。アレクたちにとつて幸運だったのは彼らの切符を確かめていた車掌ではなく、誰が乗つているかも把握していない駅長が乗つてきたことであつた。座席の下に隠れていた4人に気づかずに誰もいないと把握すると口除けを上にあげて、隊員たちに誰もいないでしょ？とばかりに指さすと列車を降りていつた。

列車の後方ではピンスラーが副隊長と話している。

「どうやら、この列車には乗つていないようだな」

鼻の大きな副隊長は自らの愛人と待ち合わせしている時間が迫っているのを思い出して、ピンスラーにいい加減に「どうやらそういうあります」と言い添えた。

「列車には乗つていなかつたのだろうか。この日の列車はこれが最後だつたな？」

ピンスラーは仮面をかぶつた顔を傾けながら副隊長のほうに振り返つた。副隊長は女には弱い男だつたが、普段は職務に忠実な男であつたから、葛藤した。この日3便目の検車だつたので隊員たちの士気が下がつていることも知つていた。が、愛人の甘く柔らかな体を思い浮かべて「そのようです」と言つてしまつた。ピンスラーにしても、やや注意散漫であつた。何故ならこの日彼は婚約者の約束を破つてきたので、彼女の機嫌をどうやってなおすか心配だつたらだ。そして何より、彼らは皇帝の身の回りを警護する職なだけに人を捕まえるのは得意ではなかつた。そして、下々の者に聞いてまわるという考えもなかつたのだ。ピンスラーは駅長に了解の合図を与えると、引き上げる準備にかかつた。

駅長は嬉しそうに運転士に出発の合図を送つた。

こうしてアレクたちはなんとかガルシャ・アルメイラまで向かうことことができた。

列車は少しずつ加速していく、やがて暴風のような速さで駅を去つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9306x/>

輝きの戦士たち

2011年11月20日03時21分発行